

「では、総理、突然ですが、このカッププレーメン一ついくらぐらいか、ご存じですか」  
 「最近買ったことがないのでよく知りませんけども、今、四百円ぐらいします？  
 そんなにはしない？」

「定価は百七十円くらいです」

この掛け合い漫才のようなやり取り、覚えていた方も多いただろう。二〇〇八年一月の参院外交防衛委員会。民主党の牧山弘恵氏による麻生太郎首相(当時)への質疑だ。翌日の朝日新聞の記事には「連夜のようなホテルのバー通いに批判も出ている首相。庶民の金銭感覚とのギャップを感じさせた」との注釈が添えられた。

カップレーメンの値段は、外交防衛問題と何の関係もない。しかし、この発言は、漢字の読み間違いなども相まって、首相のイメージダウンの一因となり、内閣支持率を大きく低下させた。

政権交代後、今度は、民主党の閣僚が同じような質疑に悩まされた。

「きょうは何の日か」「自衛隊法の懲戒処分にはどんな種類があるか」

野田佳彦首相は高校の同窓会で、こうぼやいたという。「国会の中でクイズみたいな質問がいつぱい出て、いじめられている」想定にない突然の質問に、どう答えるかは為政者の識見、人となりを知る意味で興味深い。ただ、「相手の足をすくってやろう」「おとしめてやろう」という思惑が露骨に

## 極端すぎる議論の作法

感じられる質問は、さすがにしくない。野党時代の民主党はよく質問の事前通告を遅らせ、政府側の答弁準備を妨害した。逆に自民党が野党になると、質問通告そのものをせず、経験に乏しい閣僚を立ち往生させることもあった。

ねじれ国会のガチンコ議論は、権力闘争を背景にした真剣勝負で面白くはあるが、スキヤンダルや失言追及などに偏りがちで「やり過ぎ」との印象もある。相手をあげつらうだけの批判は聞き苦しい。本当に見たいのは、分かりやすく、まっとうな政策論議だ。

その国会の現状と対照的とも言えるのが、最近の道議会だ。

十月五日に閉会した第三回定例道議会は、新聞で「論戦低調」と指摘された。前定例会までは盛り上がった北海道エアシテム(HAC)の経営再建や北電泊原発の再稼働問題の議論も少なかった。道庁内では「こんな静かな議会も珍しい」との声が漏れる。

十年ほど前まで、新聞では次のような記事をよく見たものだ。

「道議会は〇日、〇〇問題で〇〇党の代表質問の答弁調整がつかず、終日空転した」  
 道議会が始まって、道側は議会側の納得いく答弁ができない。そこで質問の後にいったん休会とし、水面下で「どんな表現なら折り合えるのか」の打ち合わせを続ける。

。道議会の悪弊と言われる「答弁調整」は「空転」とセットで白昼堂々行われていたわけだ。

それでは、空転がほとんどない最近の道議会は、答弁調整がなくなったのかというと、そうではないらしい。ある議会関係者は「答弁調整はすべて議論が始まる前に終わっている。今の議員は議会を途中で止めて道側を攻めてやろうという気概もない」と嘆いた。

「道議会名物」だった空転は、単なる日程消化が目的だったり、議員への日割り手当である費用弁償を多くもらおうというよこしまな思惑もあつたりで、極めて評判が悪かった。だが、あまりにも対決姿勢の乏しい議会は、道政のチェック機関としてさみしい。

空転という「紛糾の演出」がなくなったことで、答弁調整の存在も、外側から見えにくくなっている。道と議員の密室で談合は、より巧妙化しているようだ。そして議会は、シナリオ通り、静かに、速やかに終わる。

仕組みが違う国会と道議会を同列には論じられない。国会からは「活発な議論の何が悪い」、道議会からは「入念に事前調整した方がかみ合った議論ができる」との反論が聞こえてきそうだが、それにしても極端すぎないか。どんなものにも程がある。

八由V